だいじょうぶ？

子宮頸がんワクチンを受けましょう

姫路市医師会
スポーツ医学
委員会

小 林 眞一郎

子宮頸がんは、ワクチン（HPVワクチン）接種とがん検診と適切な治療により今世紀中には世界からなくなるといわれています。世界が子宮頸がん撲滅に向けて努力し、罹患率・死亡率ともに減少しているなか、先進国でありながらわが国だけは微増しているのが現状です。ちなみに、ワクチンを積極的に導入しているスウェーデンにおいては、子宮頸がんは約93％が予防され、フィンランドにおいてはほぼ100％に近い予防効果が出ています。

2013年４月、国はHPVワクチンを定期接種とし、積極的接種勧奨を始めました。その後、接種の対象者で希望する小学校６年生～中学校３年生での接種率は71.9％にまで登りました。しかしながら接種後に起こるというけいれんや慢性疼痛や種々の自律神経障害などを含む複合性局所疼痛症候群（CRPS）が報告され、SNSやマスコミを通じて大々的なネガティブキャンペーンが起こったのでした。国は３ヶ月後に積極的勧奨を中止してしまいました。対象の思春期の女子では注射後の迷走神経反射による失神は好発します。つまりワクチンでなくてもどんな注射でも失神する人はある訳です。その上、周囲の人々がSNSを通じて根拠のない情報を流し続ける訳ですから、ワクチン接種前後の不安と恐怖が思春期女子の様々な症状を増幅していったのでした。

2015年に有名な“名古屋スタディ”が報告され、内容は我が国におけるHPVワクチンとワクチン接種後に報告されている24の症状との間に、意味のある関連性はないというものでした。2017年６月にはWHOワクチン安全性諮問委員会が、あらためてHPVワクチンの安全性を評価しました。ワクチン接種後の症候群が、ワクチンの直接的な影響によるものであるという証拠はないということでした。安全性と有効性に関する国内外のデータを基に議論が積み重ねられ、また、副反応などへの予防接種健康被害救済制度も整い、2021年11月に国は積極的接種再開を決定しました。残念ながら、2013年から2021年までの８年間ワクチン接種がストップしていましたので、がん検診が現状のペースのままであれば、2095年までは日本の子宮頸がんの罹患数は減らないであろうと試算する報告もあります。

勧奨が中止されていた期間に接種を逃した17歳以上の女性（平成９年度生まれ～平成18年度生まれの女性）に対する救済策としてキャッチアップ接種も同時に開始されました。子宮頸がんワクチンの接種年齢が20歳以上になると、その効果には疑問が残ります（性交未経験の女性の場合は例外です）ので、17歳以上の女性でも早めにキャッチアップ接種をおすすめします。子宮頸がんは性行為によるヒトパピローマウイルス（HPV）の感染から発生することが100％明らかになっています。現在は頸がん発生を90％予防できるワクチンが登場しています。ワクチン接種年齢にある女子をお子様として持たれている方々は、恐れずに積極的にHPVワクチン接種をお子様に促して下さい。なおキャッチアップ接種の方への公費負担は2025年３月末までとなっていますのでご注意下さい。